平成十年度春季講演会要旨

大分県の歴史風土をみる

大分市教育委員会事務局参事　秦　政博

ヒナマツリの源流

ふるさとの歴史を考えるなかで、大分県のはどんな歴史風土をもっているところかを考えてみる必要があると思います。

先日新聞で日田の草野家や広瀬家で雛祭りの雛飾りが始まった、という報道がありました。両家の雛飾りには大分の江戸文化の象徴ともいうべき感がある。三月三日の雛祭りには民間でもお雛様を飾る家が多いが、あらためてヒナマツリの起源を考えてみようと思います。

広島県福山市に芦田川という川があります。昭和四八年にその川の改修を行ない、川口にある広い中州を取り除く工事が行なわれました。言い伝えでは、かつて常福寺（現明王院）の門前町がこの中州にあったということです。「備陽六郡誌」という記録によれば、延宝年間に大洪水でその町がなくなったというのです。ともあれ改修がおこなわれることになりました。そこで改修に先立って発掘調査を行なうことになったところ、大変な遺跡が発見された。平安時代から戦国時代にかけて、この沖積地の中につくられた中世の都市です。これが草戸千軒町遺跡です。そこで、草戸千軒町遺蹟調査団が編成されて、日本の中世都市の姿を明らかにするために一八年間わたって調査が行なわれて、多くの住居跡や生活用具が発掘されました。

その草戸千軒町遺蹟のなかに一〇ケ所に及ぶ多くの井戸が発見されました。奇妙なことに三分の一の井戸の中から薄板で作った男性のシンボルが出てきます。昔の人の発想の妙というのか、じつは、井戸を女性にたとえてその上に男性のシンボルを吊すと、男女の関係にならって井戸水がコンコンと湧くことを願う人々のお呪いであったといわれます。

このように人体の部分や人形を薄板で作ったものを形代といい、人形の形代を人形代といった。人形代では男性は股間に突起をつけ、女性は切り込みをいれていました。

平安時代には、当時の天皇は一年間に一八八四枚の人形代を使ったといいます。天皇は一撫一吻といって、その人形代で患部を撫でたり息をはきかけ、自分の病気を乗り移らせて川に流したのです。京都の貴族の社会ではこのようなお呪いの世界が日常の世界でありました。

これがいわゆる流し雛の風習であり、この風習が雛祭りの原型になっているわけです。

今のような雛祭りの形になったのは江戸時代になってからです。とくに、元禄の頃から町人の経済力が強くなると豪華な雛人形を飾るというに変わって、現在のような雛祭りが定着したのです。

さきほどのように雛祭りの原型は邪鬼を祓うお呪いにありますが、この邪鬼について考えてみましょう。

邪鬼は鬼で、節分も鬼祓の行事です。また、古代の人が、羽根つきの羽根を胡鬼子、羽子板のことを胡鬼板といいましたが、この胡鬼子は鬼の子のことで、羽根つきは鬼の子を追いやる所作なのです。

ところで、胡とは西方シルクロードの彼方イランやペルシャなどの中近東の世界を指すことばです。胡瓜・胡弓・胡麻などはみな西方渡来の意味で「胡」の字がついています。古代の文化や物資はみなこの国から中国を経て日本にもたらされました。ところが、平安時代の文献を見ると疫病など邪悪なものと鬼も、文物と共に西の胡の国からから日本にやって来たと考えられていました。邪鬼もこの文化の道を通って西方からやって来るということになっています。

平安時代の記録の多くは、疱瘡などの疫病は西の九州

で流行して山陽道を東に登って畿内にやって来るので、西方、つまり九州地方はあまりよく見られてなかったのです。

それでは私達の住む世界であるこの九州について、少しばかりながめいみましょう。

豊後は九州か・大分県民気質

九州の位置はわが国では西にあたります。九州の古名を筑紫と呼ぶのは畿内から西海道の尽きるところという意味です。東のつきるところを、みちのおく・陸奥というように、古代の人は畿内を中心とする地域感覚をもっていました。

我々はその九州の中の大分県の人間です。大分県は明治四年の廃藩置県で生まれ、明治九年に豊前域の宇佐・下毛が組み入れられて県域が広がり、この大分県の主要部分は豊後であります。

豊後国が記録に出てくるのは、文武天皇がいた頃ですが古くは豊後は豊前と一体になって一つでした。これを豊国といいました。これが豊の前の国と後の国に分割されていったとものの本に書かれています。豊国の源流を探ってみると、今の行橋の辺りが発祥の地であるようです。ここは御食国または御膳国と呼ばれていました。

中津の北に三毛門という駅があります。ミケとは古代に朝廷の食料の供給基地となった地域です。三毛門とはミケの国の入り口ということです。南大分に三ケ田町という地名があります。三ケを三毛・御食と同じだと理解すると食料基地の田圃があったところという意味になると思われます。つまり大分の地は食料基地となる豊かな豊国であったにちがいないのであります。

大分という地名のもとは第十二代の景行天皇の伝説に出てくる、広い田地「碩田」が大分となったといわれています。しかし、よく考えてみると、もともと大分の地名の起こりは大段で、高崎や霊山、明野の大きな段丘に囲まれたところという意味であろうと思います。段はキダのことで、この大きな段丘「大段」がオオイタになり、段は刻むとか分けるとかいう意味があるので「分」となり大分となったと考えられます。三つの野原「三野」が美濃に変わったと同じようなことです。

豊国、御食として出発した大分に住む我々は、どんな

県民性をもつのでしょうか。

まず、九州周辺の県から調べてみると、福岡は、華奢国と呼ばれ、古来から東アジア・東南アジア諸国との交易の窓口であり、鴻臚館という外交使節接待のための迎賓館がおかれました。また、太宰府は遠の朝廷とも呼ばれ、朝廷の九州出張所がおかれた華やかな国でした。

佐賀は江戸時代から武人の国で、明治以降になっても軍人が多く輩出した地で、「葉隠」の精神を伝える地域です。

長崎は、大分と同じようにキリシタンを早くから導入した所で、江戸時代には出島を中心として、清国、朝鮮やオランダとの窓口となり、何となく異国の香の漂う性格をもった地です。

熊本は肥後モッコスであ。南北朝の時代に、菊地氏は九州全域が北朝についたのに、懐良親王を迎えて南朝の中心となって孤軍奮闘しました。頑固一徹の精神が熊本です。

鹿児島はボッケモンといって非常に地方的、古来、薩摩隼人といわれています。しかし、地方的でありながら幕末から近代日本をリードした質実剛健の資質をもったところです。

宮崎は色がはっきりしません。豊後と薩摩に挟まれてどっちにもつかずの形で、歴史的にもこのような経過をたどっています。

わが大分県人は熱しやすく冷めやすいこと。もう一つは大分県人の通った跡には草も生えぬアカネコンジョウといって、他人の足を引っ張るといいます。それは江戸時代の少藩分立が原因だといわれますが、関東の旗本領などを見ると実に入り乱れているし、宮崎も七つの藩領に別れていましたが、大分県の様にはありません。必ずしも小藩分立という政治的分断の要件がアカネコンジョウの原因とはいえないのです。

瀬戸内海回廊と豊後

大分県は、おめでたい時に主にお酒を出す酒の文化圏にある国ですし、また、大分はうどん文化圏の国です。決して焼酎や蕎の文化圏ではありません。うどん文化は讃岐に代表される瀬戸内海小麦文化圏であり、酒文化は

灘の生一本のつながると思われるのです。

大分は瀬戸内の風習を十分身につけている地域であると考えられるのです。

言葉を取り上げても、大分県は東京式のアクセントです。山口や広島・岡山の人のアクセントも大分のものとよく似ており、言葉だけを聞くと大分かと錯覚を起こしそうです。山陽道は東京式のアクセント域で、大分までつながっているのです。このように言葉の文化圏をみても、大分は瀬戸内の文化圏に入るのです。

気候の面をみると、北九州の方は日本海式の気候で冬は季節風の関係で雪が舞い非常に寒い。南九州の鹿児島は南海式の気候です。東九州の大分は瀬戸内式の気候です。

また、中世の武士の活躍をみれば、福岡を中心とした北九州は少弐氏が活躍した地域であり、鹿児島は薩摩の島津氏の勢力下、そして中九州は大友氏の支配下にあったのです。

大分は大分なりに九州の他の地域とは異なり、瀬戸内圏の大分ということを感じるのであります。

瀬戸内圏である傾向を、歴史的な経緯をたどってみると、建国神話では神武天皇が、日向の美々津を出発していわゆる東征の業につかれます。間もなく佐賀の関付近まで来て激しい潮流に行く手を阻まれて困ってしまいますがその時、釣りをしていた土地の神様の珍彦（うずひこ）が、水先案内にあらわれます。早吸（はやすい）の瀬戸を乗り切って無事に宇佐まで水先案内をしたというわけです。「ウズ」は早吸の瀬戸の渦ともいいますし、また、長いもの、実は海蛇のことで、蛇信仰があったともいわれる。これが豊後水道が書物にあらわれた最初の物語で、天皇が御通りになった海の道として登場してくるのです。

『伊豫国風土記』の逸文に、大穴持命（おおなもち）が仮死状態にあった少名彦名命（すくなひこなのみこと）をた救うめに、大分の速見の湯を下樋（したひ）で道後まで引いて湯浴みさせ、無事に蘇生させたと書かれていいます。これは、大分・四国の文化交流の歴史を物語るものです。古代の人は豊後と四国との緊密な関連性は当たり前の話であったと思われます。

神武天皇の息子に神八井耳命（かみやいみみのみこと）いう人がいた。古事記によると、この子孫は十八の氏族とに別れたという。その

中には大分君、阿蘇君、肥君、伊豫国造、奈良の方では雀部君、大野臣などで、これを繋ぐと瀬戸内海を渡って奈良盆地を通り、さらに知多半島から海岸を北上して常陸に至るのです。これは九州の中を貫いて瀬戸内海が一つの神話圏として繋っているということを理解することができるのです。ここにも海の道の存在を確認することができるのであります。

姫島の黒曜石の分布をみると、瀬戸内海の沿岸と中国山地を経て日本海側の島根や、四国の四万十川の流域や南高知にまで広がっています。また、東四国の徳島の近くまで伝えられているのです。これらは瀬戸内のルートを通って四国山脈を越えるか、南海ルートを通ってもたらされたのです。海の道が大きな役割をはたしているのです。

弥生式土器の交流はいうまでもなく、愛媛の地域からから出るもの、大分県側から出るもの、佐伯の下城式土器、板付式土器など同じ形式の土器が発掘されているなど、北九州の交流の強さを物語るのです。

大分県には、大和の政権の影響をうけて造営されたという前方後円墳がいくつもあのます。なかでも一番古いといわれる宇佐の赤塚古墳があります。国東半島にもいくつかありますが、真玉の大塚古墳、杵築の小熊山古墳、大分の大臣塚古墳、庄の原の蓬莱山古墳、坂の市の亀塚古墳、上ノ坊古墳、佐賀関の築山古墳、臼杵の臼塚古墳などがあります。これらの前方後円墳は大和の王権と、同盟か支配服属関係を持った豪族が許されて造営したものです。これは大和王権の勢力が瀬戸内を通って海からまずやって来たこと、ついで、内陸部に浸透していきますが、一寸時間を置いて竹田の七つ森古墳ができたのは、そのような経過からです。

日本書紀は、景行天皇が周防の国の沙婆（防府）を船出して豊前の長峡県（行橋）に上陸して海岸沿いに大分に至り、内陸部の土蜘蛛の征伐に向かったと伝えています。これは、前方後円墳が瀬戸内からやってきて広がったことを物語るのです。

中でも亀塚古墳の上に立つと豊後水道や四国にまで丸見えである。この古墳は、海を意識して海に臨んで海の王者のために築かれた古墳であることが想像される。そ

れと向かい合うように杵築の小熊山古墳が別府湾の入口に対となって築かれている。まさに海の王者にふさわしい古墳である。

神戸に五色塚古墳という大古墳がある。これは明石海峡を見下ろす位置にあり、亀塚古墳が早吸の瀬戸を見下ろす位置にあるのと同じである。海の支配を謳歌する点ではまったく同じであります。

このような大古墳が作られたのは四・五世紀ごろからで、大和政権が航海術に長けた海人族を軍事力として朝鮮半島に進出するために、ここの豪族と同盟、従属関係を結んだものと思われます。

大分が瀬戸内と深く結ばれているという歴史の意義と面白さがあります。

表九州から裏九州へ

大友氏が大きな勢力を築き上げてきたのは、大友氏を取り巻く水軍が海を押さえていたからです。国東では伊美氏や櫛来氏・真玉氏・竹田津氏、南部では一尺屋の若林氏、臼杵氏・薬師寺氏・津久見氏・鳩氏・佐伯氏などはすべて浦部水軍です。

江戸時代になって豊後の大名達は参勤交代や物資の輸送に、瀬戸内海の水運を盛んに利用した。各藩には色々な特産があって、既に江戸時代に一村一品の源流があったかのようです。別府の明礬、佐伯の紙や干鰯、岡藩の大豆、臼杵藩の紙、石灰、杵築や府内の七島藺などが瀬戸内海を通って大坂に向けて送られていました。また、肥後藩が鶴崎に、岡藩は三佐に飛び地の港をつくるなど江戸時代にはなお一層瀬戸内海ルートの水運が利用されたのであります。

江戸時代、広島県の竹原市の忠ノ海という小さな漁村に、浜胡屋という船問屋がありました。その船問屋が扱った物資を持ち込んだ回船の記録が残っています。その内、ある時期を限って調べてみると、豊後の国から五百九隻もの回船が入港しています。日向の国からは六十五隻、豊前からは五十八隻で、豊後からの船が圧倒的に多い。いかにこのルートで東（表）九州の豊後が大きな役割をはたしていたかがうかがわれます。

府内藩は二万石の少藩でありながら、城下に四十八も

の町人町がありました。同程度の石高の佐伯藩ではたったの二町、臼杵藩は五万石ですが「臼杵八町」といわれるように町人町の数は八つ。こうみてくると当時の府内藩は豊後最大の商都であったことが明白です。貝原益軒の『豊国紀行』に「萬(よろず)の売物備われり」と書かれているほどの盛況でした。瀬戸内海ルートのなせる業です。

明治を迎えると事情が一変します。明治四十二年、福岡から鹿児島まで熊本を経由して、九州の幹線鉄道、鹿児島本線が全通しました。途中三十八年、長崎本線が分岐して長崎と繋がりました。日豊本線は、三十年豊前の長洲まできましたが、大分まできたのはかなり遅れて四十五年です。ちなみに日豊本線の全通は大正十二年、豊肥線は昭和三年、久大線にいたっては昭和九年であります。

明治政府の富国強兵・殖産興業の掛け声のもとに、石炭資源のとれる北九州、大陸や東南アジアに向けて開かれたた長崎や熊本の港湾の開発が、大事な国策として必要になったからです。

明治の世の中になると交通は、海から陸の時代へと変わったのです。海路から鉄路への移行は、大分をかつての表九州から裏九州へと変換させたのであります。

大分が再び復権するのは、あの新産業都市の形成によって再び港湾が注目されてからです。

東南アジアを中心に目を付けた新らたな海の道は、新たな海のルートということになります。大分が復興するためには絶対に海が必要で、海に臨み海に出てゆく臨海工業が大分を潤す企業なのです。まさに、海の道が蘇ったということであります。

「井戸水」の美味しかった頃

こどもの頃、井戸水を釣瓶やポンプで汲み上げて飲んだものです。いま、井戸水の味を知らない人が名水とかを求めて出掛けていますが、これは人工より自然を求めるという感覚に他ならないと思います。

ところで、昭和三十年代まで大体昔の生活がつづいたと思っています。戦後の歩みをたどると、昭和廿年代は占領時代で、朝鮮戦争をきっかけにして復興が始まりました。三十年代の半ばまでは、江戸時代からの昔のまま

の生活習慣を受けついだ生活でした。後半ごろから経済成長が始まり、四十年代は昭和元禄ともてはやされるようになり、五十年代は世界の経済大国になりました。六十年はすべてがバラ色の、そして昭和末から平成にかけてバブルが弾けて今に至ったっています。

今でも「昔はよかったな」と感慨に耽る時代は、三十年代後半で終わっています。それ以後生活習慣は昔とガラリと変わったのです。日本の国土・日本の精神が音をたてて崩れたのは昭和三十年代後半以降であると思います。列島改造、地域開発といった掛け声のもとに、田圃は崩され山が切られわが国の高度成長は始まりました。営々と弥生時代から二千年積み重ねてきたこの農地が、減反や転地という形で潰されました。農業をもとに培われた、村としての協同体いう連帯感が農業の変化荒廃のなかで消滅してしまいました。

祠のもとを尋ねると、もとは穂倉で、稲穂を収める高床の倉庫のことです。命にも代えがたい稲を鼠などに食われない、水につからないため大事に貯えた倉で、これがみんなの信仰の対象となって祠になったのです。今の神社建築にこれが残っています。

「ムラ」の再生のために

稲作は大勢（ムレ）の労働でなければ成り立たない共同作業です。ムラという言葉のおこりは、人がムレること、ムレ集まって（稲つくりの）共同作業をするといった社会的要請を背景にしていると考えたいわけで、つまり村は稲作の社会構成体として生まれたものです。江戸時代の百姓一揆の「揆」は物事に心を一つにして取り組むという意味で、ここに日本の稲作農民としての伝統が続いてきたのであります。

一粒万倍の米をそだてるために、水田の工事は多くの知恵と技術と労働力が必要です。水を通して人が結ばれ、水を通して人と大地が結ばれるといわれ、水と大地を大切にしてきました。ところが、降った雨が地下にしみ込み中山間地の田を潤し、平地の田を潤して川に流れ、海に入って魚を養うという自然のサイクルが、この時代になっておかしくなってきています。

農家個数は昭和三五年に六〇六万戸あったのが、平成

七年には三四四万戸と四三パーセントも減っています。

食料自給率は昭和四〇年に七三パーセントそれが、平成七年に二九パーセントに減った。穀物だけの自給率では昭和三六年に七六パーセントあったのが、平成四年に二九パーセントに下がった。ドイツの穀物自給率は昭和三六年には六二パーセントが平成四年には百〇二パーセントです。他国は皆そのようであるが日本のみはこの始末です。つまり、農業に赤信号がともっているのです。

日本の稲作の権威である京都大学の渡部忠雄という農業学者は、「農業の荒廃は教育の荒廃と規を一にする」と書いています。農業の問題と教育の問題は同じです。彼のいうところは、減反政策が始まってから学校の不登校が始まり、学校が荒れるようになったと指摘しています。つまり、農業と人間の生活は深い関係があるとも指摘しているのです。作家の井上ひさしも、「社会の退廃の原因はこどもたちが土から離れたことである、こども達や社会の荒廃の原因の背景は、健全な農村がなくなっていることがその一つだ」といっています。

土は萬物を生み出すもとである。土を知らないこども達、土を知らない親達がどんどん出てきています。カルチャー（文化）ということばがあります。カルチベーターは土を耕し作物を育てることであり、カルチャーとは生命の源、文化とは人間活動の源ということです。土の大事さ、農業の大事さ、とりわけ日本では、水田稲作という形、これが日本の社会を築き上げてきた一番の原動力であったと、いうことをいまさら思い知らされている訳です。

いま、社会の連帯が失われようとしています。最近「ふれあい」という言葉が盛んにいわれています。これは「ふれあい」がなくなってきているからです。日本の精神が危機的状態になり、次第になくなりつつある時代のなかで、地域を知りその歩みを知るなかで、昔の良さや伝統をしっかり受け止めることのできるこどもを作ることが大切であると思います。これが歴史を勉強するの本質であろうと思うのであります。

（文責　入江）